上杉博物館の特別展「米沢中納言 上杉景勝」（前期）を振り返って
――景勝に明朝から贈られた官職の通達と冠服

連休前に米沢市上杉博物館の特別展「米沢中納言 上杉景勝」に出かけた。国宝「洛中洛外図屏風」の素晴らしさはあらためて言うまでもないが、開館十五周年記念と銘を打っているだけあって、それ以外の展示も大変見応えがあった。

前期の展示では、とりわけ上杉神社所蔵の重要文化財、景勝に贈られた明朝の通達（箚付）と冠服一式が貴重である。企画展示室の広いスペースにゆったりと飾られた緋色の明服（常服）と萌黄色の下着（便服）の色鮮やかなコントラストは絶妙である。四〇〇年の時を経たとは思えないほど、保存状態はきわめて良好で、上杉家のもとで代々大切に保存されてきたことが判る。

広い中国のこと、清朝の冠服はまだかなり残っているものの、明朝のものは大変珍しい。しかも伝世品は極めて少なく、そのほとんどは皇帝の陵墓や文武官墓などから新たに発掘された出土物で、損傷がかなり激しい。

その冠服は、朝鮮出兵の二度の戦役、文禄と慶長の役の間に試みられた和平工作の中で、明朝が豊臣秀吉を日本国王に封じるために、家臣たちにも贈られたものである。たし、冠服自体はメインではない。皇帝から景勝に授けられたの都督同知（副指揮官、従一品）の官職に伴う付属品である。

今回、景勝の箚付に加えて東京大学史料編所が所蔵する前田玄以の箚付も一緒に展示したのは、企画担当者の識見がよく示されている。前田は石田三成とともに五奉行となった人物。二つの箚付は同じ大きさで、タテ約一〇〇センチ、ヨコ約九〇センチとかなり大きいことに驚かされる。同時に、四〇セット以上の箚付が秀吉の家臣たちに届けられた。徳川家康や毛利輝元らにも届けられたのは確かである。しかし実物が現存しているのは三点のみで、そのうちの二点が展示されたのは、今回初めてのことである。しかも、戦国の乱世をくぐり抜けて箚付と冠服が揃っているのは、景勝だけである。箚付の文面には、明朝の官職を授けることと、「天朝の臣子」となった以上は、国王の秀吉をよく輔導し再び朝鮮を侵略してはならないなどと記されている。

秀吉は、日本国王に封じる内容の勅諭に激怒し、これを放擲したとされている。このため結局、和平工作は決裂し、秀吉は慶長の役へと突き進んだ。しかし景勝自身は、この箚付と冠服をどうして丁重に扱ったのか、上杉家代々の藩主たちは、何故これらをとても大切に後世に伝えたのか、景勝は和平交渉に対し、天下人たる秀吉とは異なる考えを抱いていたのではないか、などと思いをめぐらすと、興味は尽きない。

五月二一日から始まる後期の展示では、国宝島津家文書の豊臣氏大老連署状一通と豊臣氏五大老連署状三通（いずれも東京大学史料編纂所所蔵）、および豊臣秀吉遺言覚書案一通（早稲田大学図書館所蔵）が、とくに注目される。これらの文書は、すべて秀吉が死去した慶長三（一五九八）年八月から一年の間に出された。景勝の名は、前者では

まだ見えないものの、後者四通には家康や前田利家らとともにその一人に加えられている。内府の家康を筆頭にした、いわゆる「五大老」が、まさにその時期に姿を現したことがよく判る展示となるにはずである。（山形大学附属博物館長・人文学部教授　新宮学〈あらみや　まなぶ〉）

初出：山形新聞　二〇一六年五月二十七日